

## + 6 5 【ねこまた】

村びとたちが、【ねこまた】がでたと騒いでいます。

あっちにでた、こっちにもでたと、大騒ぎしています。

つまらんことに大騒ぎするもんだと、ぼくは大人たちを莫迦にしながら、懐爺のところへ行きました。

「【かいびょう】ならまだしも、【ねこまた】ほどでさわぐたあ、みっともないのう」

というと、懐爺も同調して、

「そうですね。【ねこまた】は、古い猫、つまりすごく歳をとった猫のおばけですから、【かいびょう】ほどはこわくありませんね」

「ふるいから、また、なんかのう。するてえと、ふるい、さるのおばけは、【さるまた】かのう。それとも、またやらかした、の、また、かのう」

『徒然草』や『百物語』にもでてきますね。尾が二つに裂けて分かれているから、また、なのでしょう。それでも九尾の狐なんかとくらべても、尾がふたつあるだけですから、大騒ぎすることはありません。歳をとると、あちこち裂けるのは猫だけではありません。ほら、わたしの右耳も三つに裂けているでしょう」

「あらら、どうしたんじゃ」

「【ねこまた】に噛み付かれたんですよ。若いころならすぐになおるんですが、歳取ると裂けたまんまです」

「かわいそうにのう。【ねこまた】は、みみに、かみつくんかのう」

「それはやっぱり、またに、噛み付くんですね。でも、【ねこまた】の本領は、ばけることですかね」

「なにに、ばけるんじゃ」

「お婆さんや、お爺さんに、ばけるんですね」

「ちっとも、こわくないのう」

「でも、醜いお婆さんやお爺さんにばけるんですよ」

「ちっとも、こわくないのう。みにくいおじいさんは、かいじいで、なれとる」

「ひどいことをいいますねえ。懐爺にいいつけますよ」

ここで、ぼくは首をかしげました。

「おまえ、もしかして」

「ばれたか。わたしは【ねこまた】ですよ」

懐爺にばけた古猫の【ねこまた】は白状しました。

「ほんものの、かいじいは、どうした。おまえ、くったんか」

「あんな不味（まず）そうな爺さん、だれが食うもんですか。祠のなかで、鼾（いびき）かいて昼寝中です。わたしが食いたいの、金ちゃんですよ」

と【ねこまた】は、耳まで裂けた口でいって、舌なめずりしました。

にゃんにゃんずりずり

にゃんにゃこずりずり

にゃにゃりこずりずり

にゃにゃこりずりずり

もひとつおまけにずり

（そうか、【ねこまた】は、にんげんをくうのか。そうなるてえと【かいびょう】と【ねこまた】のくべつがでけん。こまったことじゃ。もしかして【かいびょう】は【ねこまた】のなかまなんかのう。かいじいのこと、ひるねちゅうだといっとったが、いまはよるじゃ。【ねこまた】め、うそついとる。やっぱし、かいじいは、くわれたんじゃ）

やっぱりこわいと、おもった途端（とたん）に、眼が醒（さ）めました。

真夜中なのに、外では村びとたちが、【ねこまた】がでたと騒いでいました。